

「細胞診を学ぶ人のために」

三重大学教授 矢 谷 隆 一 編集
東京大学助教授 坂 本 穆 彦

獨協医科大学教授・日本臨床細胞学会指導医会長
信 田 重 光

このたび、日本臨床細胞学会の次代を担う旗頭、矢谷隆一、坂本穆彦両先生が「細胞診を学ぶ人のために」を編集上梓された。

近年、細胞診断学は穿刺吸引細胞診の導入・普及により、その適応領域も拡がり、また老健法の施行により子宮癌、肺癌で集団検診における第一次スクリーニングに、乳癌でも精検の一部に取り上げられており、細胞診断学の需要と実施範囲が著しく広がってきた。したがって、これまでの剝離細胞診に加えて現在では穿刺吸引細胞診の比率がほぼ同様ということになってきた。

本書を一読して、その特徴を一言で言えば、これまでの教科書に比べて穿刺細胞診に関連する事項の記載の比率が高くなっている点である。すなわち、基礎的な組織学的事項では、体表や管腔臓器の内腔面の上皮組織のみならず、非上皮性組織である結合組織、筋組織、神経組織などの形態にも配慮して記載されている。

更に各臓器における検体採取法の概略と、それらの方法に応じた細胞標本の作り方、また染色法も通常の方法のほかに、必要に応じて用いら

れる方法として PAS、アルシアンブルー染色をはじめとする各種の方法が網羅され、特に近年問題となっている免疫組織化学的染色法についてもわかりやすい解説がなされている。本書を読んでいて、それぞれの染色による細胞の染まり具合やその形態が頭に浮かんでくるようで、若い人達はきっとこれも染めてみたい、あれもやりたいと思うのではないかと想像している。

スクリーニングの手順の項も初心者には重要な項目で、細胞診の判定基準についてもまともによく記載されているが、そのほかに顕微鏡の構造と操作法、特に写真撮影の項目を取り上げていることも、まことに親切的な編集の仕方である。

細胞診断学各論の項では、各臓器について構造と細胞、疾患の分類と組織像、そして細胞診といずれもわかりやすく整理して記載されているが、特に婦人科での卵巣、呼吸器での縦隔、消化器での唾液腺、泌尿器での精巣(睾丸)、非上皮性組織での骨、軟骨や中枢神経系腫瘍の細胞診など、これまで専門書以外ではあまり触れられなかった領域についても言及していることは、穿刺細胞診の

普及によるもので、入門書として極めて妥当な配慮であると思う。特に各論では、それぞれの臓器の細胞診断学上重要な言葉や現象が頁の下隅に枠組みで解説されており、この試みは特に試験を受ける立場にある人達には大変頭に入りやすいものである。

また絵図や表が多く、これは知識を整理するうえで非常に便利であり、細胞のカラー写真は綺麗で、それぞれの形態をよく現していて、十分に納得させられる。

わが国の細胞診断学は、これまで各分野の臨床家によって築かれてきたという自負を、日本臨床細胞学会の古いメンバーの先生方は持っておられる。本書の編集者や執筆者がいずれも病理系の中堅の先生方であり、また細胞診実務者でもあるので、本書の編集の方針には、病理系の細胞診学者らしい整理された体系と、そして新しい時代に向かい立つ若々しさを感じられる。

現在、日本臨床細胞学会では、技師対象の細胞診検査士、および医師の細胞診指導医の試験認定を行っている。指導医試験には若い病理医の先生方が多く受験されているが、合格率は臨床家と同様である。

本書は、まず細胞診をやってみようという医師、技師に、また前述の試験を受験しようとする人達(病理医も含めて)の知識の整理に極めて有用である。広く江湖に推奨推薦する次第である。

B5判 318頁 図86 写真33
原色図200 1990 定価9,991円
(税込) 千300

医学書院 刊